東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

自らの言葉を「解釈」すること あるいは「他者」の希求：小島信夫「静温な日々」をよむ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部 公開日: 2024-02-07 キーワード (Ja): 小島信夫, 家族, 他者, 自己言及, 柄谷行人 キーワード (En): Nobuo Kojima, Family, Romance, Kojin Karatani 作成者: 疋田, 雅昭 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000205

東京学芸大学紀要　人文社会科学系　**75**: 253－267, 2024

自らの言葉を「解釈」すること　あるいは「他者」の希求
――小島信夫「静温な日々」をよむ――

*疋田雅昭
日本語学・日本文学分野

（二〇二三年八月三〇日受理）

要旨： 小島信夫「静温な日々」は、これまで晩年の夫婦生活という同種のテーマを扱った「うるわしき日々」とともに論じられ、結果的に「別れる理由」「抱擁家族」などのフィクション世界との接続という文脈で論じられるきらいがあった。本論では、この小説の表現技法に注目し、むしろ「美濃」「菅野満子の手紙」「寓話」などの小説との接続に注目し、その表現技法の効果とともに、ここで描かれる「静温」という比喩の内実を考えてみた。これは、晩年の小説も小島の伝記的事項から離れた読み方をしてみようとする論者の試みのひとつでもある。

キーワード： 小島信夫、家族、他者、自己言及、柄谷行人

「静温な日々」は一九八七年一月の『群像』に「一挙掲載」された後、同年四月に刊行されている。「うるわしき日々」【一九九七】とは「別れる理由」【一九八二】以後の小島家の様子を語る自伝的なテクスト内容とともにタイトルの語感の近さもあって、よく並べて論じられたるものであるが、実は両者の間にはおよそ十年もの年月が挟まれている。単行本の帯文には「人生の苦悩と愛――『抱擁家族』から三〇年、老いた小説家が、難病で記憶を失くした息子の中によみがえらせた思いとは……。紆余曲折の日々を淡々とみつめた珠玉の長篇小説」とある。また、最初の単行本（読売新聞社版・一九九七）の「あとがき」では大庭みな子からの「思いがけない注文」を受けた由が語られてる。

> 小島さん、あなたが今までどんなふうに生きてきたか、一般読者に向かって書く気持ちにふみいって下さったら、どんなにうれしいことでしょう。『抱擁家族』の人物たちは、あの後どんなふうに生きてきたのか、一般読者に向かって語ってもらいたいのです。それが出来ないということは、最近、『暮坂』を書いたあなたに、いわせませんよ

大庭のこの言葉は、後の講談社文庫版（二〇〇一）の「あとがき」においても、さらに詳しい形で触れられることになるのだが、確かに「静温な日々」と比べると「うるわしき日々」の方がより一層「抱擁家族」【一九六五】「別れる理由」【一九八二】という「フィクション」の延長上にあるように思えてくる。

* 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 日本語学・日本文学分野（一八四－八五〇一　東京都小金井市貫井北町四－一－一）

「うるわしき日々」の「老作家」が三輪俊介の延長上にあるのならば、「静温な日々」の「わたし」が「小島先生」と繰り返し呼ばれていることは両者の位置をよりはっきりさせることだろう。

しかし、長野での講演を引き受けた際の経験、山荘を中心とした妻との散策、登山、旅行等を描き、そこに旅行後の手紙を掲載し、さらに森敦との電話での談話を描く。こうした手法は、「美濃」「寓話」「菅野満子の手紙」で常套手段となった「小島信夫の文法」（青木健、二〇一七、水声社）を踏襲したものであるし、ここでの小島は「フィクション」と「ノンフィクション」という領域を意識的に無効化するような試みを続けていた。このことを考えると、両者をフィクション（小説）／体験という二分法で捉えようとすることはかなり危ない試みであるように思える。

「静温」という言葉は、この小説における「造語」である。これは弁護士の台詞の中に現れる「せいおんな日々」に漢字を当てたものだが、講談社から出された単行本の「あとがき」には、小島の理想とする生活には「静温」という文字以外に当てはまるものはない由がのべられている。こういった言葉は辞書には存在しないと述べる小島にとっては、当て字のつもりであったのだろうが、実際には機械工学などで圧縮流体を考えたりする際に「全温度」という概念のもと「動温」という言葉との対で使用されることがある漢字である。

物語では淡々とした、「事件」が起きないあるいは起きる前に抑えようする努力によってなし得る夫婦の日々のことを示しているようだ。現実の「トラブル」（特に息子をめぐるそれ）は、十年後に描かれる主題なので、「静温な日々」では小島家の問題を担当する弁護士は後半部の最後になるまでは現れない。だが、弁護士と老夫婦、そして息子を描く「うるわしき日々」と並べてみると、この「静温」という「状態」がなんとか維持されようとしている「日々」という主題が浮かび上がると同時に、二つの作品に不思議な呼応を見出すことも出来る。

以上のこと（静温な日々を目指そうとすること―論者註）は、いうまでもなく一種の生活の余裕といったものと関係があります。そんな余裕など、自分たちにはない、何を贅沢なという声もきこえてきます。しかし一般的にいって、この余裕を私たちは持とうとし、そのためにアクセクし、これからもアクセクしているのでしょう。これが、この小説のベースにあるもの、あるいは表面にあるもので、私夫妻、私の家族だけのことではなく、現在の一般に通じるものをもっていると私は考えています。

ここに続く文で小島は「私（小島）という老年にさしかかった日本の一小説家は、小説家というその職業によって食っているという意味において、一般に通じている」と述べていることからも、やはりこれらのテクストをフィクション／ノンフィクションという見地から考えることを我々は差し控えねばならないだろうと思う。だが続く以下の部分で議論は再び元にもどってしまう。

この小説の宣伝は、『抱擁家族』『別れる理由』に続く、第三部として扱われるかもしれません。そして、そのことには私は異存はありません。しかしこの小説は主人公がこれらの既刊の作品を書いた著者として、裸形をさらし出しているということに、特徴があります。そもそも以前から、私のやり方だといえないこともないのです。もし『静温な日々』が第三部とするなら、第四部、第五部に当たるものも、将来出現することになるかもしれません。それがそう思うように行くものではないということこそが、この小説に書かれています。

「うるわしき日々」への連続性が示唆されているように読めるのは、十年後を知る事後的な感覚であることも確かだが、であるが故に、この二つのテクストの差異性を別の観点から考えて見たい。「静温」を願う日々を描いた中で「小さい裂け目が見つかると、山ぜんたいが崩れてくるような気がする」という一節があるが、明らかに崩れてしまった山の事後を描いた日々を「うるわしき」と捉える十年後とは明らかな「断層」が見られるようにも思える。この小論は、夫婦で野山を歩き亀裂や裂け目を気に掛けながら「静温であろうとする日々」を描くことを、あるいはその挫折の物語を、「抱擁家族」や「別れる理由」よりむしろ、「美濃」【一九八一】「菅野満子の手紙」【一九八六】「寓話」【一九八七】からの接続で、一つの「他者論」として捉えてみようとする試み

である。

1　「小説」のように語る

私は長野市での母親文庫主宰の文藝後援会というのに出かけ、二時間近く話をした。はじめ主婦がひじょうに多いということだったが、そのうち全てが主婦だったということが分かった。　(13)

小島の小説にはありがちなことながら、この小説の時制（特に語りの現在）を確定するのは難しい。正確に言えば、読んでいる最中にはその確定がほぼ気にならない感覚と、いきなりそれまでの語りが相対化されてしまい別の次元に移ってしまう感覚が入り交じるため、全てを事後的に（すなわち読後状態から）考えてみても、その位置がはっきりしないのだ。むしろ、そういった確定された語りの現在という「前提」を相対化するための営為を読まされているようですらある。

「私」が講演をしたことは過去の出来事であろうが、「私」の状況と体験を説明している語りは全てが事後的であるようには感じさせない。もちろん、それは小説の「話法」としては自然なことである。この講演に「私」を呼んだのは得能芳郎。この講演を主催する「母親文庫」で万葉集を講義する人物だ。得能自身も退職した教員だが、ここの受講者たちも皆学生ではない。ここでの「主婦」という言葉にはこうした意味も含まれている。得能は「私」より五つ年長で、妻、息子、娘という家族構成も同じ、元教員であるという点も一致している。

「私」が得能と知り合ったのは、得能の娘婿である野村という男を介してである。そして両者を結びつけたのは「みすずかる」という枕言葉である。「すず」は篠竹（すずたけ）の意であり、篠竹の産地の意で、「信濃（しなの）」にかかるが、その読み方は「みすず」ではなく「みこも」が正しい。「みすずかる」という読み方は、国学者賀茂真淵が『万葉集』にある「み薦刈」を「み篶刈」の誤字であるとしそれを「みすずかる」と読んだことで広まった。当時既に鹿持雅澄の『万葉集古義』などその間違いを指摘する声もあったが、「みすず飴」などの名前からも分かるように近代では既にこの読み方は一般化していた。昭和に入って国文学者の武田祐吉が『万葉集全註釈』の中で誤字説を採らず「み薦刈る」のままとし、しかも「みこもかる」と読むべきであると主張した以後、「みすずかる」は学術的に誤用であることになっている。

枕言葉がある特定の言葉を導くように、この言葉は得能と信濃の地（長野）に「私」を導いた。「私」が上田の郷土博物館で見たという「みずずかるしなの」から始まる歌とは何であったのか。「みすずかる」を「みこも刈る」とおきかえても、万葉集には二首の歌しか存在しない。

みこも刈る信濃の真弓わが引かばうま人さびて否と言はむかも
（巻第二96久米禅師）

みこも刈る信濃の真弓引かずして弦作るわざを知るといわなくに
（巻第二97石川郎女）

久米禅師と石川郎女の間の恋歌であるが、上田の郷土館では、彼らが東山道を越えようと上田あたりから山を越えていった地図も掲示されていたという。この展示そのものを確認することは出来なかったが、ここで注目すべきなのは、このテクストが上田の山を挟んだ形で、長野と軽井沢の間の山々で男女の「道行き」が描かれていることである。小島は自らは車を運転しないので、長距離の移動は妻が運転することが多い。運転に関する話題は最晩年の「残光」【二〇〇六】に至るまでこの夫婦の話には必ずといっていいほど現れる。また、浅間に山荘があり晩年の多くの作品はここで執筆されていることもあり、今回の講演も、軽井沢まで車で送ってもらい、そこから鉄道で上田を経由し長野入りしていることが描かれる。

最初の章は、長野講演とその後の食事や戸隠への探訪の様子が描かれその後、妻にその話を語った後、読者に現在ある依頼により夫婦について語る小説を書いていることが語られる。現在ある小説を書いている姿がその小説であるというのは小島の小説の「常套手段」であるが、その様な手段でしか己を確認し得ないことが、得能との対話を通して描かれている。得能の生活（主婦たちに万葉集を講義する日々）をうらやましがる小島に対して、その理由を以下の

様に答えている。

ぼくらは、一人でする仕事です。ぼくは特別かもしれないが自分を相手にしてする作業です。ぼくはいつだってそうだったかもしれないが、自分が何を考えているかということは、書いてみなければ分からない。ひたすら続けて行くうちに出てくるものなら出て来る、という姿勢です。これは不安定なものですから、ぼくはこのことに現在不満でもあります。ぼくはこうした課題をもったままの状態でやってきました。(34)

これが、万葉学級の講師をしている日々に得能が「生き甲斐」を感じ「恵まれている」と感じることから生じた言葉であることが重要である。得能は自分の娘婿や子供たちや孫との関係に様々な不満をもっているが、それは大なり小なりどの家庭にも似たような事情はある。だが、小島との相違はその状況における自己の状態を迷わず言葉にしていることにあるのではないか。得能と小島を結びつけたのが娘婿の野村であり、その野村と小島を結びつけたのは考古学者のHである。Hは、同業である考古学者からも、周辺領域である文学者からも認められていない。いわゆる、孤高の学者である。

得能は、生田やHのみならず折口信夫の「想像力」をも認めようとはしない。だが、自ら新しい「学説」を立ち上げるわけでもない。

私は得能芳郎が主婦たちと彼の言葉によると万葉の一首々々について、一回に十首ぐらいずつとくに新説を唱えようという思いあがった考えおこさず、主婦たちと読んでいて、これからも命つづくかぎり読み続けるということは、羨ましいことだ、何しろ十年間に半分終わっただけでこれから読み終えるにはあと十年かかるのだから、私がいかにこのことが巧妙な生き方であるか、といった。(42)

得能が自らを確固たるものとして語ることが出来るのは、「仕事」を通じて自らが知らないことを知ろうとするのではなく、既知のことを唯一解として教えようとすることを「仕事」としているからだ。両者は「文学」を媒介として繋がってはいるが、文学を書く仕事と教える仕事を通じて対照的な関係にある。

ずっと講演や只今までの座談の先生のお話を承っていて、実は私は学生のときの五十嵐力先生のことを思い出しました。五十嵐先生は、作品そのものを自分で味わうように仕向けられ、同時に、自分の訳したとおりに答案を書かないと、認められませんでした。私はなぜ結論をいってくれないのか、とも思い、一方自分をおしつけることだと反撥しましたが、私は今は、自分自身もそんなふうに講義をしていますが、まちがっていなかったのだ、と思っているところです。(18)

この言葉は小島の講演をきいた得能の感想だが、小島の言葉から得能が見出した「解釈」(答) は、あくまでも得能が見出したものであり、それが小島の事前に用意していた「意図」であるとは限らない。そもそも、小島は「答」が分からないから書こうとするのであり、それが分からないから書き続けているのである。むろん、それは小島が得能の言動から読み取ったものでも同じことであるが、小島は得能の言動から読み取ったものを、それを考える自己という水準と同じ位置に置くことにより、得能だけでなく物語の中の自分自身からもメタの位置に立ち、相手に「解釈」を与えたりはしない。これこそが、小島にとって書くことの意義であるのだとでも言わんばかりに……。

「それで、会社での彼のアダ名は公爵といわれているそうです。色々と講釈をしてきかせるというのと、家柄がいいということのようです。彼は私ども夫婦にコピイした資料を送りつけてきて、よく勉強しておくようにいいます。ぼくは昔からおしつけられたものには興味を示さない方なので、ろくに目を通さずに行くし、家内も行く場所だけは心得ておくためにその程度のことはしらべてはいます。旅費は何といっても私どもが持つことになるからです。彼は勉強せずにいたことが分ると、一応おこってみせます。野村といいますが、……(以下略)。」

小島は野村に対して批判的ではないが、義父にあたる得能は常に厳しい評価である。似たところもあり対照的でもある不思議な二人が邂逅した時期と丁度同じ頃、「別れる理由」の最終章にも「出演」している柄谷行人が『探究Ⅰ』（一九八六年、講談社）を上梓しており、そこで柄谷は「教える」「語る」ということに関してヴィトゲンシュタインを通して興味深い議論をしている。

柄谷＝ヴィトゲンシュタインにとって、言語は「語る―聞く」で考えるものではなく、「教える―学ぶ」という関係性において考えられるべきものである。「教える」には一見、一方的な権力性と「学ぶ」側との双方に共通した前提が付与されているように見えるが、実は事態は逆で、「教える」側には何の優位性も存在しない。それは、「教える」側が出来ることは「語る」ことだけで、それは「教える」内容を直接語っているのではない。そもそも、教える側の「語る」こととは、教える側にとって「学ぶ」＝「真似る」だけであり、教えたい内容が何であったのかはコミュニケーションの成立以後に事後的に感得される何かであるからだ。

柄谷は、「教える」に'tell'と'teach'の二種類の意味があることを強調し、その本質を前者に見出す。本当に教えたいことを直接語ることは出来ない。語れることは教えたいことそのものではない。また、語ることは出来てもそれを強制的に聞かせることは出来ない。聞くというのは本質的に相手に依存した行為だからだ。

また、これを「言語を教える」と考えればもっと本質的な議論になる。言葉を「聞く」ためには言葉を「知っている」必要があり、そのためには言葉を「学ぶ」必要がある。「知っている」や「学ぶ」はより根源的＃本質的な行為であるにも関わらず、我々は「聞く」ことに直接性や本質性を見出してしまうような「顚倒」を起こしがちである。

われわれは、ここであらためて「語る―聞く」と、「教える―学ぶ」の違いを強調したい。以前に、私は、「語る主体から出発する」（ソシュール）ことは、結局「聞く主体」から出発することだといった。「語る―聞く」という関係は、「語る＝聞く」という自己関係（モノローグ）にほかならない。つまり、それは〝内省〟に、あるいは独我論に帰着するのである。

だが、柄谷＃ヴィトゲンシュタインがここで主張しているのは、そうした対象への態度変更の問題よりも、むしろ、「教える」という態度の誤解に伴う「他者」欠如の問題である。

このようにして私は、講演とそのあとの座談会では、もっぱらしゃべる人間となり、ひたすら食べる人間にもなった。しかし得能夫妻や婦人たちとのときには、やさしいやさしい気持にもなり、ほとんど眼と耳との人なりそして食べるべきときにはよく食べた。色紙も書いた。婦人たちは、得能の命令で市内に入ると、おとなしく姿を消した。　(38)

得能はH氏や折口信夫のみならず娘婿である野村をも文学的に肯定しないが、小島は旅を通じて、あるいはともに旅をする人々として自己の文学に現れる（描かれる）ものたちとして、彼等全員を等しく肯定する。それは、小島のコミュニケーションが柄谷の言う「教える―学ぶ」の側にあるからだとも言えるが、一方で小島自身が自らを「知らない」というところから出発しているためでもある。

2　「教える／学ぶ」から始める

先に引用した得能のことをうらやましがる理由の後、妙な例示が続く。ある美術家（書家）がテレビ番組でインタビューされている様子である。

「（前略）。七十五になったときにノイローゼになった。それでよくよく考えてみたら、自分はいわば短編小説を書くようなことをしていた。そうではなくて長篇小説を書くようにしなければ駄目だと思った。当然長篇小説とはどういうことか、大作のことかとアナウンサーはききました。そうすると美術家は、自分は毎日同じ所にキャンパスを据えて、同じ山をすこしずつかき加えて行く。その日にはその日のことしか考えない。ただ対象を見ているだけだ。この人は書家ということになっています。金石文字みた

いな文字を書きます。一字一字石や金を穿つように書いている。その番組でぼくが見たときには、『駑馬千里奔』とかを書いてみせていました。最後の文字の半分あたりで紙が終ってしまった。そこで筆をとめた。ぼくはあなたの〈小学級〉の話をきいたときからそういうことも思い浮かべていました」

「東洋的というか日本的なものですね。あなたでもそうなのですか」　(35)

一読してわかるように、最後の得能の応答は今ひとつ的を射ていない。小島もこの言葉には応答せず、話題は「主婦」たちのことに移ってゆく。千石英世は、『暗示の文学、鼓舞する寓話』(二〇〇六、彩流社)において、小島の美意識の表明とともに、その美意識を相対化しようとして相対化しきれない得能の言葉から、言語のもつ根源的な機能としての「アイロニー」を読み込もうとする。そして、そのアイロニーを会話の不全ととる以上に、以後続く「主婦」という存在の「アイロニー」的側面への布石として読もうとしている。

『静温な日々』は、作者の老境の苦節を語った私小説のように読めて、しかし、描かれているのは、様々な主婦の姿であるともいえよう。主婦とは何か。他の者との関係で多種多様な容貌を呈する関係の結節点、矛盾の総合体。母親であり、妻であり、夫人であり、嫁であり、娘であり、婦人である位置としての人間。そして、位置関係を離れて一人の人間に帰ったときに名づくべきふさわしい名を持たぬ存在、名づければ、必ず、別名を名のるアイロニーの存在、そのような影のような、というか、数字における零のような存在が、少しうつむきかげんに、『静温な日々』という作品の中を足早に往き来している。

批評的スタンスにある短い表現に色々と読み込もうとするのは学者的な穿ちであるとして控えるべきだろうが、むしろ「静温な日々」というテクスト全体としては、このアイロニー的存在に対する「教える―学ぶ」／「聞く―語る」という態度が問題となっているように思われる。

老齢の講師である得能にとって、母親学級の「学生」たちは、彼の妻とさほど変わらない者も少なくない。得能と再婚した現在の妻との関係、病死した前妻との関係、これらは形式としては小島と重なるものがある。だが得能は、「主婦」たち、あるいは「主婦たちとその家族」たちとの関係から自らの夫婦の在り方を「学ぶ」ことはない。「文学」を「教える」という「仕事」と「学ぶ」という「私事」を明確に分けているからだ。

だが、小島は、明らかに「主婦たち」からも、「得能夫妻」からも、そして生田たちからも「学ぶ」。ただ、それは、単に「学ぶ」から始めていないからではない。たしかに、小島は「聞く人」であり同時に「見る人」でもあるのだが、それ以上に「書く」人なのである。

「ぼくはあなたに前にも申しあげたようにこの講演旅行が何故印象にのこったのか、そのことに移って行き、そもそもこの自分という人間はどういうところに来ているか、ということに移っていき、そこから自分の中から出てくるものがあればそれをとりあげて書いていくというよりいい方法はないと思うのです。人はタワイもないことだというかもしれないが、どうしてか一つ一つがみんな印象にのこり、すべてに拡がりぼくを覆いつくすようなかんじがするのです。どれも捨てられない。そのことは、とにかく書いてみましたが、そのあとのことなのです。」

「小島さん、ぼくは今のあなたのいわれたことは、とても、とても、いいことだと思います。それは一番基本のことで、そこに戻るのですから」(41)

これは長野講演後の自宅での森敦との電話の場面である。ここでも、小島は「語る／聞く」人である。にも関わらず小島が独我論に陥ることがないのは、やはり「文学」が関係しているからだ。ただ、そこは得能とは異なる事情がある。小島にとって文学は「教える」ものではない。まずは「語ってみる」ものだからだ。

J・デリダは、音声至上主義の独我論的側面を「人は語ろうとする声を自身で聞こうとする」というような形で批判するが、小島の書記行為(エクリチュール)は、「自己」を描こうとすることの失敗の連続であると言ってもいい。非常に逆説的な言い方ではあるが、だからこそ、小島は独我論的な境地に陥ることはないのだ。書

き続けることを担保にして、小島の書記行為は常に「他者」に開かれている。

長野での出来事を語った小島に妻はこう応える。

「あなたは小説を書くことをやめて、万葉の講読を主婦たちとやって行きたいということなの」

と眉をひそめて真剣にいった。

「そういうわけではないのだけど」

彼女はいくらか、安堵した様子である。彼女は私がその前でいったことを、すべてその言葉通りにとって疑わないところがある。　(43)

長野での「物語」は妻の理解する「解釈」にはうまく接続しない。だが、「物語」と「解釈」が接続しないまま、得能家や主婦たちの「物語」は、小島の家の「物語」としてのみ「接続」してゆく。もちろん、小島の家を語ることは、単なる偶然の結果などではない。

「それならいいけど、私はあなたが、向うで講演がうまくいかなかったのではないか、身体の調子がわるくなったのではないか。それから、その身体のこともこれからとりかかる長い小説のことでずっと書きはじめずにいることのせいだし、書きはじめないことも、これから永久に書かずに終ることになったとしたら、あなたはきっと意気消沈してくらすでしょうから、そうなったらこの私はそれを見ているのがつらくてつらくて仕方がなくて、早く死んでしまうかもしれない」　(43)

妻との物語は既に書かれ始めている。だが、興味深いのは、この時点で既にテクスト上では、長野での講演のいきさつが「語り」終わっており、その様相を「小説」に書こうとする日々が描写されていることだ。つまり、この夫婦の物語は現在語れている最中だが、読者にとっては、この夫婦が話題にしている「小説」は既に書かれ、提示され始めているということだ。

私は現在自分の生きている姿というものを、小説の形にまとめようとしている最中に、予定された講演の日が来てしまったので長野市へ出かけた。タイフウ前の大雨がやんだのが夜明けになってからだったので、くずれた道を妻の運転で山を下り追分の油屋の前を通って中軽井沢駅へ着いた。うっかりそのまま構内へ足をふみ入れそうになってから、彼女が手を振っていることにちがいないと思いふりむいた。彼女は車の中から手を振ってそのまま去って行った。列車は二十何分おくれた。何となくおくれつつあることを彼女に伝えようとしたが、そこにいるはずはないので物足らなかった。講演を終え、土産を携えて改札口に近づいてのぞくと、一日半前とは別人のように堅い表情をして立っていた。考えてみると、いつもそうなので特別のことではない。ただ改札口で何かひとりでに考えごとをしていたのかもしれない。それよりたぶんこちらの方が堅い表情をしているせいで、彼女の方もそうなっているのかもしれなかった。

ここまで書いてきて私は中断した。それから一両日して、森敦さんに電話した。　(41)

ここから先に引用した森敦との電話の場面や小島夫妻の会話の場面に繋がる。圧縮され洗練された文章からは、対照的にそれまでの長野についての冗長とも言える語りが小島の戦略によるものであることを如実に語っている。だが、むろんこれは、それまでの長野についての語りがただの余剰であったという意味ではない。

3　傷の輝　あるいは　日課（ルーティン）の日々

「それなら、得能さんは困るわねえ」

「口に出していわないだけで夫妻は夫妻で考えているのだろう。息子夫婦も娘さんもいるのだから」

「方針は決めているのかしら、それともアイマイなままかしら」

「たとえアイマイであっても、それも方針かもしれない。そういうことより、それまでどう生きるかということを考えているということを、ぼくにいおうとしていたのだと思うよ」

「ちゃんとした栄養剤を毎日のんでいらっしゃるのかしら」　(45)

夫婦の会話はかならずしも噛み合ってはいない。だが、それを極力夫は顔にすら出さないようにしている。それを「危険な綱渡り」と称する。むろん、夫婦であるからには、妻にも何かしらの思惑があるのかもしれない。だが、現実も小説も夫にしか内的焦点化を許さない。そこで夫（＝小島＝語り手）は、自らが小説を書けないでいることと、体調を崩したことと、妻が前から楽しみにしていた登山計画が頓挫していることを合理的に分析、統合し、夫の負担にならぬように「真実」を打ち明けようとしないという妻の「内面」として提示してみせようとする。つまり、夫婦は深い部分で互いを気に掛けているということだ。その根拠は、過去にも同じ様なことがあったという夫（語り手）の経験である。数年前に断続的に続いた同じ様な時には小諸の病院へ治療に行っている。その際にみた北アルプスの風景が、夫婦の登山の記憶へと繋がる。

私たち夫婦が山へ行くようになったのは、三田村という先達があってのことである。彼は野村の友人である。

彼が私たちをはじめて北八ッの天狗岳に連れて行った。　(46)

小島の小説は物語展開や時系列で接続されていない。むしろ、思い出された記憶のシニフィアンが同様なシニフィアンを介して別の物語を引きこむ。三田村は、あの得能の娘婿の野村を小島に引き合わせた人物であることを、既に読者は知っている。そして、まるで読者が知っているように、小島を助手席に乗せていた三田村の姿は、妻に替わってゆく。北八ッの天狗岳への登山は夫婦が登山をするようになる直接のきっかけである。ここから夫婦の山の思い出の紐帯となる人物が加わることになる。矢野と呼ばれるこの人物は三田村の直接の知り合いではない。矢野と三田村と小島（夫妻）は、まさに山小屋はアルプスの山々を介して繋がっているのである。

以後、くり返される登山の体験の最後に「槍」へ登ったある朝の出来事が語られる。ある朝、妻が居ないと思って捜してみると、眠っていた部屋の天井の上の中二階の畳の上で日課の中国式体操をしている。

私はもう当然目をさますべきであり、夫婦共通の日課が開始するのだ。本来なら私もまた、彼女と同じように、中国式体操をすべきなのだ。それを私は軍隊で毎朝やっていたかたい体操をお義理ていどにやってすまそうとしている。　(54)

山あるいは山荘での生活は東京都の生活と比べれば、どちらかが日常／非日常の関係となるはずである。しかし、この物語ではどちらにいても、同じ事がくり返されることが模索されている。山での移動あるいは山への「移動」において、夫婦は言葉を交わし時には議論じみた様相を示すこともあるが、全体として夫婦はどこにいても予定通りにくり返されてゆくことが理想とされる。妻にとっての「同じ事」には、夫が小説を書き続けられることが含まれており、夫にとっては、何も起きない日々がくり返されることが理想とされる。だが、皮肉なのは夫の小説は、夫婦の表層と深層のアイロニーそのものが主題になっていることだ。科学用語としての「静温」には、「動」との対立に加えて「高温」や「低温」との対立を内包しているが、山荘に居ても小さな「移動」が、小さな亀裂の入り口を露呈させる。夫婦は「体操」という最初の日常（ルーティン）を終えると、続けて高原に向けて「移動」するという日常（ルーティン）に移る。この「移動」は、昨夜露呈した亀裂の入り口を塞いでいく行動として描かれる。

長野市の得能氏の家においてと同じように、追分の私の家においても、私と妻の二人がどのように一日を、朝起きてから寝るまで、それから夜中においても、送るかということが、とても重要な関心事なのである。そういうわけで七時を廻るか廻らぬかに夫婦は争うようにして、先ず高原へ向って出発する。争うあいては互い同士であり、周囲の山荘の住人であり目に見えぬ東京の誰彼である。（その中には私の息子夫婦さえも入っている）昨夜彼女は、ときどき見るような夢を見たかどうかということはいまこのときに当つては考えないことにする。また彼女もそれは口にはしないであろう。今は朝なのである。　(54)

ここで、妻から夫に、友人の話を介して開示されるのは「性」の問題である。夫が長野で講演している間、妻は山荘で旧友との時を過ごしていた。その際、妻は友人の性生活の様相を聞き出す。

「彼女たちは、一週に一回くらいは、夫婦の生活があるのですって」
「二人とも、そうなの」
「そうなのよ、あなた。さきに××さんがそういったあと、あなたはどう？　って△△さんにきくことになったんだけど、おどろいちゃった」(56)

さらに、この友人の一人は、夫の愛人についてまで克明に語っている。この話をする小島の妻の姿は、いつの間にか前妻のそれと重ねられる。前妻とは「別れる理由」あるいは「抱擁家族」における、あの妻であることは、読者には容易に想像がつくが、物語はまたそれを別のシニフィアンと重ねてゆく。

「お父うちゃま、私たちは何もリチギに回数を決めなくてもいいのよ。回数だけが問題でないのだから。私そのことをいっちゃった。いわない方がよかったかしら」
「そんなことはない」
「びっくりしたような顔をしてたわ。ほんとうのこといいすぎたかしら」(60)

「お父うちゃま」とは小島の小説の中で妻や子供達がしばしば発していた呼び方であったが、ここでは「娘の口ぐせ」であり、それは「母親の口マネ」であると説明される。そうとは知らず口にした妻の台詞は、まさにシニフィエから切断されたシニフィアンの連鎖として現前されている。これを小説内連鎖として読者から見れば、ここで重ねられるのは「時子」「前田永造」の姿であり、さらにはその不貞の記憶（記録）である。「抱擁家族」は妻の不貞の記憶が中心として語られるが、「別れる理由」には夫側の不貞が虚実交えた形で描かれている。夫と妻の言葉の中に（のみ）現れる愛人の存在。言葉によって（のみ）示される老夫婦の性生活の存在。それらは内実（シニフィエ）を伴ったものではないが、その言葉（シニフィアン）だけで夫婦の「静温な日々」に確実な「皺」を刻む。

そういった言葉の「皺」を「日々」の「日課（ルーティン）」は覆い隠してくれる。「皺」は過去からやって来て、「日々」の「日課（ルーティン）」は常に未来からやって来る。挿入される村に来たばかりの頃の村人とのトラブルのエピソードは、こうした「日課（ルーティン）」にも「過去」があることを語っている。

この物語はしばしば老境の「性」をテーマにしたものであると言われている。だが、なぜ「性」なのだろうか。ロマンチック・ラブ・イデオロギーのもとでは、性は愛の「目的」ではなく「結果」である。夫婦生活は、その「結果」の継続である。独り身で暮らす若者たちにとって「性」は非日常であるかもしれないが、夫婦の中では日常である。この日常は、他者との「性」関係の排除によって成立する。もし、このルールが破られれば、夫婦にとっての傷あるいは「皺」となり、その後の生活に大きくのしかかることになる。小島はこの「傷」「皺」の問題を何度も描いて来た。夫婦の様々な傷を癒やすのは夫婦の日常としての「日課（ルーティン）」であるが、「性」そのものは「日課（ルーティン）」であることを拒む面がある。こうしたロマンチック・ラブ・イデオロギー下における性の矛盾は、小島家における特別な状況などではない。

ここで左へ折れると風向きが変り冷気をかんじる。そして坂になる。そこですべらないように心がける。ぶざまなところを見せたくないばかりか自分に対して見たくない。もし彼女がすべったとしたら彼女のぶざまなの見ないようにするか、あるいは、それをかばわなければならない。彼女のいうように、二人でいるというこの時間を十分に生きるし、生きているということを互いに認識した方がいい。(73)

会話、行動、判断、選択。「日課（ルーティン）」は、「皺」や「傷」を露呈させないように慎重にくり返される。こうした夫婦のコミュニケーションで、もう一つ夫が強く意識していることに「同じ顔にならない」ということがある。または、「伝染しない」「うつらない」という言い方をされることもある。こうした背景には、夫婦が同じ状態にならないことが想定されているが、それは結果的に相手

を「他者」としてみることに繋がっている。ただし、これは「他者」として相手を尊重するという意味とは少し異なる。先の引用部でも、認識すべきなのは「生きているということ」であるが、それは「互いに」それぞれの「生きている」を認識すべきだという意味である。この「他者」の問題は後でもふれる。

もちろん、どんなに注意しても、「日課(ルーティン)」で「ミス」を犯すこともある。それでも、粘り強くくり返すしかない。

「あなたなら大丈夫。もう仕事にとりかかるわよ。とりかかりさえすれば、道はおのずから開けるわよ。私、あなたを信じている」

村へ入って、長屋の一つであるわが山荘が見えたところで、彼女は急に近づいてきて、囁くようにそういった。「また元気になったら、いつでもいいからしてね。スキンシップでいいから。仕事が開始すれば、元気になる。私わかってるんだから」 (74)

たしかに、この物語では「性」が大きな話題となってはいるが、それはくり返される「傷」となる「癒」、それを癒やす「日課(ルーティン)」の「日々」の一つに過ぎない。真の問題はこの循環にあるが、ここに小島と得能の本質的な違いが露呈する瞬間がある。

4 「手紙」の中の物語

夫婦の「日課(ルーティン)」は、朝食を決定し、つくりそしてともに食べることを経て、「日課の第三ページ」が始まる。

食後私は当然のことだが、食器をキチンに運ぶ。そのあいだに洗い終っている洗濯物を妻は干しにかかる。私は書斎に行き、机に向いそこの窓から彼女が背のびをするように洗濯物を組にかけている印象派ふうの光景を見ているが、なるべく見て見ぬふりをする。彼女はそのあと、この五、六年来戦時中に女学生だったことをかこちながらもいそしんでいる英語の勉強にとりかかる。夫婦は同じようなしかめ面となって別の部屋の別の机に向っている。 (74)

ここから始まる妻の「習い事」のくだりは、シニフィアンのレベルで得能に万葉学級で学ぶ主婦たちのそれと対応している。妻が今学んでいる課題は、夫へ英語で"Love Letter"を書くことであるが、それも同様に、英語を教える夫(小島)は、主婦に万葉集を教える得能に対応している。だが、同じ「教える」を通じて、小島と得能には全く異質の意味が生じていることは前に述べたとおりである。

そして、この英文が「手紙」であることが、小島から得能への手紙文に繋がり、そして得能や主婦たちからの返信の開示に繋がる。

私は妻をつれてこんどいつか奥社までのぼって行き、その帰りに得能さんのいわれた植物公園も訪ねます。こんなわけで私は有頂天になったまま帰って参りました。すべて得能さんのおかげです。 (80)

小島の手紙は得能への感謝で満ちている。しかし、この後に続く予定であった文学の話(独歩の「忘れえぬ人々」と島木健作の「赤蛙」の話)は、読者には開示されながらも、得能には送られなかった。その部分を切り捨てた理由は、小島自身にも「分からない」とされながらも、以下のように語っている。

私はこの「追伸」の部分は切りすてて同封しないことにした。その理由は自分でもよくは分らないが、書き送ってしまえば、せっかくの私の思いは、私から忘れられてしまうような気がしたからであった。彼が私に話したこれらの作品をセットにしての愛着は、彼は今まで語ってきたことであろうか。それとも、彼の母のことと同じように、誰にも話したことがないことなのであろうか。そうとすれば、なぜ私に話したのであろうか。 (81)

小島は二人の会話の思い出を、思い出として封じ込めるために、あえて話題にあがった作品の「解釈」を切り捨てた。これらの作品に「解釈」を与えないことは、二人の世界のシニフィアンをそのままそこに置いておこうとすること

を意味する。「解釈」を共有することは、多かれ少なかれ他者の領域に足を踏み込むことになるからだ。

小島が妻とのコミュニケーションにおいて常に気にしているのは、相手の言葉を自己の言葉に置き換えないことである。一部の主婦たちが得能の小旅行に付き添ったこと。付き添った主婦の一人に小島が長野に寄宿していた家の奥さんの姪にあたる人物がいたこと。得能が文学散歩に妻を連れてはゆかないが、その旅の様子は話して聞かせること。同じ「物語」を共有していながら、これらの人々には異なった「解釈」が存在している。そのことは、むろん承知している。だが、得能も、その妻も、主婦たちも、現実の「物語」に「解釈」を与えたりはしない。そこに生じる「齟齬」が取り返しのつかない「齟」をうむかもしれないからだ。

だが、彼らは、文学に関しては様々な「解釈」を小島に突きつけてくる。

私は先生がその昔叔母の家におられた頃、『万葉秀歌』や茂吉や赤彦などアララギの歌人の歌集といっしょに、ロシアの小説やチェホフの劇などを読んでおられたということを思い出しました。思い出したというより、こちらの方は、たえず頭にあったことなのです。私は以前にポリショイ・バレエ団の東京での公演を録画したものをテレヴィで見ました。マイア・プリセツカヤが彼女自身の振付けで、チェホフの『小犬を連れた奥さん』を演じているのを見ました。この人は『アンナ・カレーニナ』も手がけているとのことです。それからこの六月に私は東京へ出て行って、彼女のコンサート用『瀕死の白鳥』を見ました。（89）

小島の学生時代の知己を知るこの主婦は、様々な物語を読み、そして「解釈」して見せる。そこには、「雨の山」「抱擁家族」など小島の作品も含まれる。これらが、シニフィアンのレベルで物語を接続し演出していることはさきに指摘した通りだが、手紙の最後に主婦たちが戸隠高原でトンボを見せようとした出来事が、小島の小説「蜻蛉」と繋がっていることが明かされ、手紙の「物語」は、長野での「物語」との間に円環してゆく。

こうしてみると、小島の態度は、むしろ夫婦の「物語」には、一般的な「解釈」を与えながらも、「文学」には沈黙していることが分かる。しかし、それより重要なのは、いずれにせよ、それらは書かれてしまっているということだ。

「自らの声を聞く」ことに「外部」が無いのは、それが自分の声だと知ってしまっているからである。だから独我論に陥る。小島の書くという行為は、自らを知るために行われるものだ。実際の小島信夫は自ら作品を殆ど読み返すことをしないらしい（晩年の作品は故に、あえて読み返し「解釈」している）が、小島は自らの言葉を「見る」ために書き続けている。この「見る」は「出会う」と言い替えてもいい。小島がこのテクストで唯一特権的な位置（「外部」に触れる位置）にいるのは、小島だけが全てを「書く」からである。そして、この書く主体は、自らが出会った言葉を「解釈」しない。それは、現実であるか創作（文学）であるかに関係なく「読む」ことを、あるいは「読む」結果を押しつけないという意味だ。「解釈」とは、シニフィエを与えようとすることである。他者と「解釈」を語り合うことは、シニフィエをすり合わせることであり、結果的にはシニフィアンの自由を奪うことだ。

小島は書くことによって自らに出会うが、それを誰がどのように読むのかは、読者という「他者」に委ねられている。小島のテクストは、決まったメッセージを伝達するための手段などではない。予定も調和もなく、始点も終点もない。ただ、シニフィアンの連鎖が物語を増幅させ、それが「テクストの快楽」（R・バルト）となっている。その意味で小島のエクリチュールは常に他者に開かれているのだ。故にテクストの「私」は、独我論に陥ることはない。

5　「外部」に誘い出す「電話」

電話のベルが鳴った。書斎を通り寝室を抜け、入口を通って電話をききそこなわぬようあらかじめドアが開けてあるリヴィング・ルームへ小走りに、すべらぬように気をつけながらやってきた。（92）

電話は森敦からである。森敦との電話は、『美濃』以降、すっかり「小島の文法」になっているわけだが、ここでは、小説で描かれた講演以後の山荘での

物語が「再演」されている。ここで焦点化されるのは「真野重子」という妻の友人の話である。話題は山荘には殆ど息子も娘の家族も訪れないこと。小島夫婦と真野重子たちとの交流が中心であるが、そこにトルストイの文学の「解釈」が混じってくる。

あなたの山荘へ集まっていっしょに雑談して食事をしたり、どこか出かけて行ったりするような人たちは、みんな夫婦仲がいいのでしょう。ぼくは『戦争と平和』で、けっきょく、ナターシャがいかにもおかみさんになるところが面白い。(95)

もちろん、これにも「文脈」があり、子供たちの家族が山荘にきた際に小島は別の山荘で仕事をしていた。それが子供たちが山荘に寄りつかなくなったきっかけであるという話であるが、その際に執筆していたのが『私の作家遍歴』の「トルストイ」の章であった。

森との電話は、夫婦仲の話をしながら、互いの最近の創作や現在書きかけのものについての話になる。

ぼくは思い違いをしていたもののようです。考えに考えて、ぼくは出発したのですけど。だから、ぼくはその作業にとりかかっているのです。だからなお『戦争と平和』のことを考えるのです。そしてまた一方において、あなたのことを考えるのです。――しかし、そこと東京では遠すぎます。ぜったい東京に来ているべきです――でなかったら、どうして、あなたに早くかけ、早くかけなんていうものですか。あれは、あなたが『私の作家遍歴』の中で書いていたように、ボロジノの戦闘場面のように司令部ですからね。作戦本部ですからね。(99)

この電話の最初に何故か森は妻がそばにいないことを確認している。そのこと自体にさしたる意味はないようでありながら、話の最後はまるで愛人が妻と山荘にいる男に帰京をせかしているようである。電話の最後には、ある漢字を示唆する際に、重子と手を重ねて字を書いたという話で終わる。

「たとえ手を重ねたうえに、もう一つ手が重なって包むようにしたって、大したことではないですよ」

「そうですよね」と私が、答えた。「お互いの家の長い過去をねぎらい、相手の家のことをねぎらうということは、あったっていいじゃないですか。まあ握手みたいなものですからね」(90)

電話がおわっても小島の中で会話の妄想が続く。これを比喩的に「森さんと私が一つになった」と表現しているように見えながら、直前にしていた「手が重なる」という話が継承されている。妄想の中で全ての老夫婦も、あるいは同性の友人でさえも、言葉の世界の中で互いに重なりひとつになってゆく……。

この電話からの妄想は、重子のもとに出かけていた妻の帰宅によって現実にかえる。妻は、夫を「千三百」に誘う。

ひたすら、登りつづけ、二人はこれからもこのように生きて行く、そして現在にだけ没頭し、先きのことは、この現在の続きである。かくの如くしっかりと大地に足をつけて（しっかりと足をつけなければ、登ることは不可能だから）いる。これ以上のことが願えるだろうか。だから調子をなるべく合わせ、摩擦はなるべく早めに解消し、時折、呼吸を乱さぬていどにたわいのない、身体を鼓舞するようなおしゃべりをし、そのためには、小説家の私といえども、その仕事のことは一時忘れ、そして、森さんの早く取りかかれという言葉もしばらく忘れたふりをして……(102)

ここからしばらくの間、夫婦でともに山道を散策する美しい場面が続く。夫婦の目的地は「天国の森」と呼ぶ山間に開けた農地である。老夫婦たちは、こうして傷の癒を「日課（ルーティン）」で癒やす日々をくり返してゆくだろう。だが、物語はここで終らなかった。

森の声が小島が小説家であることを忘れさせないことと同様、ある「気にしている一つのもの」が、夫を「小説」へ、人生を「書く」ことへ誘いだそうとしている。

ここから、物語は、息子と娘の家族の話に移る。もちろん、これも、さきの森との会話で既に触れられている話題を、再び「小説」の形にして「再演」し始めている。ここで再び話題に上るのが、さきの三田村である。三田村は、山や長野の人々と小島を繋ぐ重要な人物であり、そのことは繰り返し好意的に描かれている。書かれている出来事は大したことではない。東京の近所に新居を構えた息子の家族が山荘に寄りつかなくなった経緯、息子の家族とともに過ごそうとする時の不思議な違和感である。

あのとき、生じたものは前にもあったもので、私に生じたのか、それより前に妻に生じたのか、既に息子の方に生じていたのか分らないところもあった。そのことを、私は小説の中で展開してみなければならないと、漠然と考えていたことでもあった。

そのためには順序立てて考察してみなければならないと確かにいいきかせてきたのだが、私は苦痛をおぼえていた。やっとそこから逃れることが出来たのに、という思いがあることがわかっていた。たとえば三田村たちと、若やいだ気分でつき合っているときには、いつも不快を表情にあらわしている息子が頭に浮んだ。

(110)

松本という地を挟み、三田村と息子は明らかに対照的に重ねられている。後に描かれる三田村の両親も夫の妻への態度なども、小島夫婦とは対照的に重ねられることが多いが、一方で両親と息子夫婦という関係には、共通点も多い。

中央高速から南信を経由して松本に至るルートを含め、東京と国立、名古屋と国立、飛騨山脈や筑摩山地などに対するアクセスも、新幹線や関越自動車道から長野道の開通以前は、県庁所在地の長野市よりも松本はよい立地にあった。国立という小島の住まいの位置もあり、小島の小説では、中央高速経由に由来した信州へのアクセスが描かれることが多い。息子との話で、松本が境界としての位置にあったり、山荘の日々を「常界」としたとき、長野市が上田の山々を挟み、「異界」の様な様相をもって描かれていたのはそのためである。

物語の最後は、「書き下ろしの小説を書かねばならない」という力によって半ば強制的に東京の地に引き戻される。山荘のある地での日々を相対化するために、その「外部」に追いやられたように、山荘の日々への名残惜しさの感情がさし挟まれる。Qからの手紙で触れられた物語を東京のテレビで見るという経験（ここでも「解釈」は語られない）が少し語られたあと、テクストはこの語り手をさらに物語の「外部」に引きずり出す。長野での講演の直後に予定が入った、前橋での講演である。ひきうけた題は「家族について」。ここで、既に書かれてしまっている物語を、講演の中でさらに相対化している。

私は、八月末だったか九月の初めだったかに、長野へ講演に行きました。その直前か、直後に前橋の本屋さんの煥乎堂を通じて皆さまの集会の席で話すように依頼されました。煥乎堂は私もよく知っているなかですし、それに私は長野の講演のあと、どういうわけか楽しい気分になっているので、ついお引受けしてしまいました。ですから、直前ではなくて直後ではないかと思います。演題は、中に入った燥乎堂の岡田さんの話では、〈家族ついて〉がいい、ということでした。

(121)

ここでの講演では、今まで書かれてきた（読者からすれば読んで来た）内容が語られるがさほど新しい「情報」はない。当然、この講演にもこれまでの小説の「解釈」と呼べるようなものもない。

私は今、事件というものが起らぬよう、気をつけて日を送りたいと思っています。また、たとえ起るにしても、大事に至らぬよう、そうして生きている以上、その日その日を生甲斐があるように生きている、と思っていられるよう、そういう暮し方をしている私や私の妻のことを、私はえがきたいのです。ところがそう思いすぎるとかえって具合がわるくなるものです。自然体がいいといいますが、なかなか自然体というのは保ちにくいので、努力しているということで、かろうじて自然体になろうとしているのです。追々とお話します。

(124)

これも、傷の癒を「日課（ルーティン）」で癒やす日々という物語と同様の話題である。だが、たった一つ、この講演で詳しく述べているのは、息子夫婦との関係悪化の

詳細である。

嫁は電話で息子の酒量がふえ、乱暴し、家にいるときには朝からのみつづけて、といったことなどをたしかにいってきて、意見するようにと、頼んでいたことが何度もあり……（中略）

ところがある日嫁は妻を通じて、息子が、「お父うさんは自分を愛してはいない。昔からそうなのだ」といっている、といったことを伝えたのです。　(132)

話は、妻と息子夫婦の間におこる遺産の問題にまで至る。講演の後、「小説」の形式に戻ったテクストは、最後に相談にのってもらっている弁護士について語る。この弁護士も「別れる理由」や「月光」等小島の小説を「解釈」する。もちろん、この弁護士とのやりとりも、この煉についても、のちのちに「うるわしき日々」という「外部」で再び十年後の小島によって語られることになるだろう。だが、この小説ではまだ「内部」の語りである。

テクストは、講演後、高崎駅で見送られる場面で終わる。この物語は、二回にわたって講演の後に見送られているのだ。全体の構造で見れば、長野での講演全体が、高崎での講演と重ねられているとすら読める。さらに、マクロ的視点から見れば、長野の地が浅間の地に、浅間の地が東京にと、二重に東京に封じ込められている。そして、東京でテクストは書かれ出版される。だが、それは相対化の完遂ではない。テクストは、読者という「外部」との「結節点」であるから。

さきほどの、弁護士についての語りは、最も「外部」にある語りの一でありながらも、それは講演の話の水準に挟み込まれる。こうして、このテクストのメビウスの輪は完成し、テクストは物語を内包したまま、読者という「外部」に運ばれていく。

Bulletin of Tokyo Gakugei University, Humanities and Social Sciences, **75**: 253 – 267, 2024

"Interpreting" One's Own Words or Seeking "Others":

About "Seion na Hibi" by Nobuo Kojima

HIKITA Masaaki*

Japanese Linguistics and Literature

(Received for Publication; August 30, 2023)

Abstract

Nobuo Kojima's "Seion Na Hibi" has been discussed together with "Uruwashiki Hibi," which dealt with the same theme of marital life in his later years, and as a result, it was discussed in the context of connections with fictional worlds such as "Wakareru Riyu" and "Houyou Kazoku" In this paper, I focused on the expressive technique of this novel, but rather on the connection with novels such as "Mino," "Mitsuko Kanno no Tegami" and "Guwa," and considered the effect of the expression technique and the substance of the metaphor of "quiet temperature" depicted here. This is also one of the theorists' attempts to read his later novels in a way that separates them from Kojima's biographical matters

Keywords: Nobuo Kojima, Family, Romance, Kojin Karatani

* Tokyo Gakugei University (4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan)